

夏

寺田寅彦

青空文庫

一 デパートの夏の午後

街路のアスファルトの表面の温度が華氏の百度を越すような日の午後には大百貨店の中を歩いていると、私はドビュシーの「フォーンの午後」を思いだす。一面に陳列された商品がさき盛った野の花のように見え、天井に回るファンの羽ばたきとうなりが蜜蜂を思わせ、行交^{ゆきか}う人々が鹿のように鳥のようにまたニンフのように思われてくるのである。あらゆる人間的なるものが、暑さのために蒸発してしまつて、夢のようなおとぎ話の世界が残っているという気がするのである。この夢の世界を逍遙している幾千人か

のうちの幾プロセントかはまたおそらく単にこのフォーヌの夢を見るだけの目的で、あてもなく彷徨しているかもしれない。こういう意味でデパートメントストアは一つの公園であり民衆の散歩場である。そうして同時に博物館であり、百科辞典であり、また一種のユニヴァーシティであるのである。そうしてそれがそうであることによつて、それは現代世相の索引でありまた縮図ともなっているのである。

食堂や写真部はもちろん、理髪店、ツーリスト・ビュロー、何でもある。近頃郵便局の出来たところもある。職業紹介所と結婚媒介所はいまだないようであるが、そのうちに出来てもよさそうなものである。今でも見合いのランデヴーには毎日のように利用

されているくらいである。球戯場などもあつても差^さ支^しえ^つか^かはない。しかし百貨店の可能性がまだどれほど残されているかは未知数である。その一つの可能性として考えられるものは、軽便で安価な「知識の即売」である。法医工文理農あらゆる学問の小売部を設けることである。

親類に民事上の訴訟問題でも起りかかった場合に、われわれはある具体的法律上の知識の概要を得ておきたくなる。そういう時に、もし百貨店で買物をした節に十分か十五分の時間と二円か三円の金を費やして要領を得ることが出来れば便利である。

わざわざ医者にかかるほどでもないちよつとしたできものを診てもらつて適当な療法を教わつたり、また病気であるかないか分

らないようなからだの工合を話して意見を聞くようなことが、あ
たかも鉛筆一本、ハンケチ一枚買うように気軽に出来れば便利で
ある。

家を建てようと思う人が自分の素人設計図を見せてまずい所を
直してもらったり、ちよつとした器械でも買う場合に目的を話し
て適当なものを選定してもらわれれば好都合である。メロンを作
つてみたいと思う人が自分の畑の適否を相談し、栽培法の要領を
教われれば軽便である。

もう少し実用を離れた知識でもわれわれは時に自分の畑違いの
事で一通りのことを心得ておきたい場合がある。書物を読めばい
いとしたりとところで第一どういふ本を読んでいいのかそれが分らな

い。そういう場合にもし百貨店で買物の節に軽便安直な知識を購入出来れば工合がいい。たとえば相対性原理とはどんな事か、マルキシズムとは何か、バロック芸術とは何、ベースボールとは何、ジャズとは何、そういうことが望みのままに早分りがすれば甚だ便利であり、また時代に適應する所以ゆえんであるかもしれない。

現代に隆盛を極めている各方面の通俗的な雑誌はこういう安価で軽便な皮相的な知識を汽車弁当のおかずのごとく詰め込んであるが、ただ自分のちようど欲しいと思うものを自分の欲しい時に手にいれようとするには不便である。それには百貨店に私のこの提案が採用されると便利であろう。

これらの「知識の売子」にはそう大したえらい本当の学者は入

用はないのみならず、かえって甚だ厄介でかつ不都合であろう。この選定はむしろ百貨店の支配人に一任すればよい。

某百貨店の入口の噴水の傍の椰子やしの葉蔭のベンチに腰かけてうっとりしているうちに、私はこんな他愛もない夢を見ていたのである。

(昭和四年八月『東京朝日新聞』)

二 地図をたどる

暑い汽車に乗って遠方へ出かけ、わざわざ不便で窮屈な間に合せの生活を求めに行くよりも、馴れた自分の家にゆつくり落着いて心とからだの安静を保つのが自分にはいちばん涼しいしょうか銷夏法

である。

日中の暑い盛りにはやはり暑いには相違ない。しかし何か興味のある仕事に没頭することが出来れば暑さを忘れてしまうことは容易である。それにはあまり頭も苦しめなくて、ただ器械的に仕事を進めて行くうちに自ずから興味の泌み出して来るようなことが適当である。例えばある年の夏は江戸時代の大火の記録をその時代の地図と較べながら焼失区域図を作つて過ぎた。仕事はあの意味では器械的であるが一つ一つの記録を読んで行くうちに昔の江戸の生活が、小説や歴史の書物で見るとよりも遙かにによじつ如実に窺うかがわれて実に面白かつた。昔の地図と今の電車線路入りの地図と較べているうちに色々なことを発見して独りで面白がることも出

来た。

今年はある目的があつて、陸地測量部五万分一地形図を一枚一枚調べて河川の流路を青鉛筆で記入し、また山岳地方のいわゆる変形地を赤鉛筆で記入することをやっている。河の流れをたどつて行く鉛筆の尖端が平野から次第に^{けいこく}谿谷を^{さかのぼ}遡上つて行くに随つて温泉にぶつかり滝に行当りしているうちに^{ゆうすい}幽邃な自然の幻影がおのずから眼前に展開されて行く。谿谷の極まるところには峠があつて、その向う側にはまた他の谿谷が始まる、それを次第にたどつて行くといつの間にか思わぬ国の思わぬ里に出て行く。

去年の夏は研究所で油の^{じょうりゆう}蒸餾^{じょうりゆう}に関する実験をやつた。ブンゼン燈のバリバリと音を立てて吹き付ける焰の^{ふくしや}輻射^{ふくしや}をワイシャ

ツの胸に受けながらフラスコの口から滴下する綺麗な宝石のような油滴を眺めているのは少しも暑いものではなかった。

夕方井戸水を汲んで頭を冷やして全身の汗を拭うと藤棚の下に初嵐の起るのを感じる。これは自分の最大のラキジュリーである。夜は中庭の籐椅子に寝て星と雲の往来を眺めていると時々流星が飛ぶ。雲が急いだり、立止まったり、消えるかと思うとまた現われる。大きな蛾ががいくつとなくとんで来て垣根の鳥からすうり 瓜の花をせせる。やはり夜の神秘的な感じは夏の夜に尽きるようである。

(昭和五年七月『大阪朝日新聞』)

三 暑さの過去帳

少年時代に昆虫標本の採集をしたことがある。夏休みは標本採集の書きいれ時なので、毎日捕虫網を肩にして旧城跡の公園に出かけたものである。南国の炎天に蒸された樹林は「小さなうぐめく生命」の無尽蔵であった。人のはいらなような茂みの中には美しいフェアリーや滑稽こっけいなゴブリンの一大王国があつたのである。後年「夏夜の夢」を観たり「フォーヌの午後」を聞いたりするたびに自分は必ずこの南国の城山の茂みの中の昆虫の王国を想いだした。しかし暑いことも無類であつた。それは乾燥したさわやかな暑さとちがつて水蒸気で飽和された重々しい暑さであつた。「いつでもまるで海老えびをうでたように眼の中まで真赤になつてい

た」という母の思い出話をよく聞かされた。もつとも虫捕りに涼しいのもあつた。朝まだ暗いうちに旧城の青苔あおごけ滑らかな石垣によじ上つて鈴虫の鳴いている穴を捜し、火吹竹で静かにその穴を吹いていると、憐れな小さな歌手は、この世に何事が起つたかを見るために、隠れ家の奥から戸口に匍はいだしてくる。それを待構えた残忍な悪太郎は、蚊帳かやの切れで作つた小さな玉網でたちまちこれを俘虜ふりよにする。そうして朝の光の溢るる露の草原を蹴散らして凱歌をあげながら家路に帰るのである。

中学時代に、京都に博覧会が開かれ、学校から夏休みの見学旅行をした。高知から三、四百トンくらいの汽船に寿司詰になつての神戸までの航海も暑い旅であつた。荷物用の船倉むしろに蓆を敷いた

上に寿司を並べたように寝かされたのである。英語の先生のHと
いうのが風貌魁偉ふうぼうかいいで生徒からこわがられていたが、それが船ふなよ
暈いでひどく弱って手ぬぐいで鉢巻してうんうんうなっていた。

それでも講義の時の口調で「これではブラックホールの苦しみに
優るとも劣ることはない」といって生徒を笑わせた。当時マコー
レーのクライヴ伝を講じていて、ブラックホールの惨劇が一同の
記憶に新鮮であったのである。

酷寒の季節に酷暑に遭った例がある。高等学校時代のある冬休

おおむた

みに大牟田炭坑を見学に行った時のことである。冬服にメリヤス
を重ね着した地上からの訪問者には、地下増温率によつて規定さ
れた坑内深所の温度はあまりに高過ぎた。おまけに所々に蒸気機

関があり、そのスチームパイプが何本も通っているのである。坑夫等はもちろん裸体で汗にぬれた膚はだにカンテラの光を無気味に反映していた。坑内では時々人殺しがある。しかし下手人は決して分らない。こんな話を聞かされたりして威おどされていたために、いつそうの暑さを感じたのかもしれない。やっと地上へ出たときに白日の光の有ありがたみ難味を始めて覚えたのである。

高等学校を卒業していよいよ熊本を引上げる前日に保証人や教授方に暇いとまごいに廻った。その日の暑さも記憶の中に際立きわだって残っているものである。卒倒しそうになると氷屋へはいつて休み休みしたので、とうとう一日に十一杯の氷水をのんだ。そうして下宿へ帰ると井戸端へ行つて水ごりをとった。それでも、あるいはそ

のおかげで、からだに別条はなかった。

滞欧中の夏はついに暑さというものを覚えなかったが、アメリカへ渡っていわゆる「熱波」の現象を体験することを得た。五月初旬であつたかと思う。ニューヨークの宿へ荷物をあずけて冬服のままワシントンへ出かけた時には春のような気候であつた。

ワシントン
華 府

を根拠にしてマウント・ウエザーの氣象台などを見物し

て、帰つてくると非常な暑さで道路のアスファルトは飴あめのようになり、馬が何頭倒れたといううわさである。その暑さに冬服を着て各所を歴訪した。夜寝ようとするとベッドが焼けつくようで眠られない。心臓の鼓動が異常に烈しくなる。堪え兼ねてボーイを呼んで大きな氷塊を取寄せてそれを胸に載せて辛うじて不眠の一

夜を過ごした。その時に氷塊を持ってぬつと出現した偉大なニグロのボーイの顔が記憶に焼きつけられて残っている。それから、ウエザー・ビュローの若い学者と一緒にあるいた。ある公衆食堂で昼飯を食ったときに「君、デヴィルド・クラブを食ってみないか」というから、何だと聞くと、蟹かに肉にくに辛い香料をいれてホツトにしてあるから、それで「デヴィルド」だといって聞かされた。このワシントンの「熱波」の記憶にはこのデヴィルド・クラブとあのニグロの顔とが必ずクローズアップに映出されるのである。用事をすませてバルチモーアに立つという日に、急に「熱波」が退却して寒暖計は一ととびに九十五度から六十度に下がってしまったのである。

父が亡くなった翌年の夏、郷里の家を畳んで母と長女を連れ、陸路琴ことひら平高松を経て岡山で一泊したその晩も暑かった。宿の三階から見下ろす一町くらい先のある家で、夜更けるまで大声で歌い騒ぎ怒鳴り散らすのが聞こえた。雨戸をしめに来た女中がこの騒ぎを眺めながら「またお米があがったそうなの」といった。聞いてみると、それは米相場をやる人の家で、この家の宴えんらく樂の声が米の値段のメートルだというのであった。

その後再び高松を通過した時に遭った暑さも、私有レコード中の著しいものである。風に吹かれるとかえって余計に暑くて窒息しそうで、こうなると街路の柳の夕風に揺らぐのが、かえって暑さそのものの象徴であるように思われた。

シンガポールやコロンボの暑さは、たしかに暑いには相違ないが、その暑さはいわば板についた暑さで、自然の風物も人間の生活もその暑さにびったり調和しているので、暑さが美化され純化されている。今思いだすだけでも熱帯の暑さの記憶は実に美しい幻影で装飾されている。しかし岡山や高松の暑さの思い出にはそれが無い。後楽園や栗りつりん林公園はやはり春秋に見るべきであろう。九十五度の風が吹くと温帯の風物は赤土色の憂愁に包まれてしまふのである。

のどもと喉元過ぎれば暑さを忘れるという。実際われわれには暑さ寒さの感覚そのものも記憶は薄弱であるように見える。ただその感覚と同時に経験した色々の出来事の記憶の印銘される濃度が、そ

の時の暑さ寒さの刺戟によつて、強調されるのではないかという気がする。そうしてその出来事を思いだす時にはその暑寒の感覚はもう単なる概念的の抜殻になつてしまつていようである。

今年の夏も相当に暑い。宅のすぐ向う側に風呂屋が建つことになつて、昨日から取^{とり}毀^{こわ}しが始まつた。この出来事によつて今年の夏の暑さの記憶は相当に濃厚なものになるであらうと思われる。

(昭和五年八月『東京朝日新聞』)

四 驗潮旅行

明治三十七年の夏休みに陸中釜^{かまいし}石^{いし}附近の港灣の潮^{ちようせき}汐^{せき}を調

べに行つたときの話である。塩釜しおがまから小さな汽船に乗つて美しい女学生の一行と乗合せたが、土用波にひどく揺られてへとへと酔つてしまつて、仙台で買つて来たチョコレートをすっかり吐いてしまつた。釜石の港へはいると、何とも知れない悪臭が港内の空気に滲み渡つていて、浜辺に近づくほどそれが猛烈になる。夥おびただしいかもめの群れが渦巻いている。いかの大漁があつたのが販路を失つて浜で腐つたのであつた。上陸後半日もすると、われわれ一行の鼻の神経は悪臭に対して無感覺となつて、うまく飯が食えるようになった。

千歳せんざいという岬端こうたんの村で半日くらい観測した時は、土地の豪

家で昼食を食わしてもらつた。生来見たことのない不気味な怪物

のなますを御馳走になった。それがホヤであつた。海へはいつて泳いでみたら、恐ろしく冷たいので、ふるえ上がってしまった。そこから吉浜よしはままで海岸の雨の山道を、驗潮器を背負つて、苦とまをかぶつてあるいていると、ホトトギスが啼ないた。根白こんぱくといふところで煙草を買おうと思つたが、巻まきた 苳たばこはおろか刻煙草きやくみたばこもない。宿屋の親爺おやしののみしろを一服めぐんでもらつたので、喜んで吸つてみると、それは実に不思議な強烈な原始的の味をもつた煙草であつた。煙草というものに対するわれわれの概念の拡張の可能性の極限を暗示するものであつた。

吉浜へ行つても煙草がなく、菓子がない。黒砂糖でもないかと思つて歩いて歩いたが徒勞であつた。煙草と菓子の中毒にかかっている

文明病患者は、こういうところへ来ると、頭がぼんやりしてしま
う。そうして朝から晩まで鱒ます一点張りの御馳走をうけた。実にテ
ンポのゆるやかな国であつた。

日露戦争当時であつて、つい数日前露艦がこの辺の沖に見えた
という噂もあつた。われわれが驗潮器を浜に据えて、鉛管を海中
へ引っぱっていたので、何か水雷でもしかけているという噂をさ
れたそうである。

この浜の便所はおそらく世界一の広々とした明るい便所で、二
人並んで、ゆるゆる談じながら用を達すことが出来るしかけであ
る。そして子供の時分から話にだけは聞いていたチュウギなるも
のが、目前の事実としてちゃんと鼻のさきこぼしの小函に入れてあつた。

これは教育博物館あたりに保存してほしい資料である。

(昭和四年七月 『大阪朝日新聞』)

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦全集 第三卷」 岩波書店

1997（平成9）年2月5日発行

入力：Nana ohbe

校正：noriko saito

2004年8月13日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

夏

寺田寅彦

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>